

古橋選手の妙技 遊佐コーチと共に來柏



古橋豪壯に泳ぐ

(新知庵寫)

六月九日、一〇日、五九校く買つてよい。

稀有の激戦

女子は新潟中央順當の制覇

六二六名を集めて行なれた

県下高校陸上競技大会は絶好のコンディションに恵まれ

各種目に好記録を出し

の他一點に留まる様では第

四位に落ちるも致し方な

くとまだ充分とは言

うものなく、渡邊の二七點

あつた。一般的にレベルは

向上していったが味方、江口

の抜けた淋しさは覆い難か

つた。これに較べて、吉田

渡北の素晴らしい好素質で

くものなく、渡邊の二七點

あつた。一般的にレベルは

向上していったが味方、江口

のしむる前懐年を30年稿舊

に建設せよ

(これぞ競技場建設運動第一聲)

坂田四郎吉
町民

柏崎体育園事務局は、今私のような未磨訓導の言ふことは、何を対応するかと一笑に附される可能性に柏崎(刈羽郡も含む)体が充分にある。第一新聞社編集に乗り出し、既にが取り上げて呉れるか否か明治大正時代の資料蒐集を完了した。私は大正五年から十五年に至る約十年間の資料集めを担当し、戸川柏崎図書館司書の好意により、山と積む新聞、柏崎日報、越後タイムズを、柏崎体操俱樂部員數人の應援によつて片つ端から一枚一枚と、めぐらめぐつて体育關係の記事を搜し出しだす。

めぐらは進んで大正十年

三月四日の柏崎日報紙第二面である。あゝ懷しや大運動を柏崎に建設せよ

眼底に突き当るのであつた

これは私が柏崎赴任以來五

年間考え通したグランド建

設に對する懇願發表の第一

聲である。三月四日より四

日間連載で、十四字詰三百

行、四千字に余る論文(と

云うには余りに幼稚なもの

火を吐く如しと言つ次第

ではあるが)である。何分

数年間考えつけ、胸に燃

えさかつた懇願で見れば、

随つて舌端ならぬ筆端は勢

である。先ずその書き出し

が既に如何にも大袈裟だ。

「五箇年の世界大戦は終

焉を告げたりと雖も永遠の

平和は夢想だに許さず。国

際聯盟新に成りたりと雖

多く期待し得ず、悟堂氏の

軍備縮少論も理想に止まり

て実現は不可能ならん」

と世界の軍備、經濟問題

より説き起して祖国の安危

及び、國家の興隆と体育

の關係を説いて以つて大運

動場の必要を絶叫している

處誠に健氣である。

私は此の記念すべき一

文を、どうしたことか新聞

切抜きを無くしてしまつて

切抜帳叢書中に残けて

いるので、三十年振りに見

る懐しさは一段である。

白ズボンの兩教頭がスター

トとして次々とバトンをリレ

ーしたのだ。終つた者から

と匿名を用いたのは、勿論

了したのだ。

柏崎市用いたのは、勿論

了したのだ。

と匿名を用いたのは、勿論

了したのだ。

と匿名を用いたのは、勿論</